

■おきなわ環境ネット■

沖縄環境ネットワーク通信 27号

We are alive under many laws...



緊急特集 米軍ヘリ墜落事故

沖縄はだれのものなのか ～墜落からのドキュメント～

墜落～もうひとつの恐怖

米軍ヘリ墜落事故に抗議する宜野湾市民大会に参加して

日常が日常でなくなったとき

ジュゴン訴訟と国際サンゴ礁シンポジウム

林道が生物多様性の森を壊す

軍事活動と環境に関する第二回国際ワークショップ報告(1)

コスタリカツアー日誌(第3回)

… 真喜志 好一

… 照屋 久子

… 砂川 かおり

… 内海 正三

《環境情報おきなわ》



緊急特集 米軍ヘリ墜落事故

沖縄はだれのものなのか?

オリンピック開幕ムードが漂う 8 月 13 日の午後、沖縄県宜野湾市の民間地に米軍ヘリが墜落した。これまで限りなくその危険性が指摘され恐れられていたことがついに現実のものとなった。そして恐ろしいのは、墜落の事実のみではなく、その後に行われた米軍の行動と、ヘリそのものに隠された危険であった。「おきなわ環境ネット」では予定されていた紙面構成を一部変更して緊急の特集をお送りする。

墜落からのドキュメント

8 月 13 日午後 2 時 15 分 米軍普天間飛行場から訓練飛行のため飛び立った CH53D ヘリがバランスを失い、沖縄国際大学 1 号館（本館）に衝突後、駐車場に墜落。米軍人の乗組員三人のうち一人が重傷、二人が軽いけがをし、北谷町の海軍病院に運ばれた。県警によると、事故当時ヘリが接触した一号館には職員が約 20 人いたが危険を感じて逃げ、全員無事だった。事故後、現場周辺は米軍によって立ち入りが厳しく規制された。伊波洋一宜野湾市長や県の比嘉茂政副知事も一時、現場確認を拒否され、騒然とした。「直後に米兵約 50 人が構内に入り、事故現場を封

鎖。本館から職員を退去させられた」と大学職員。

午後 2 時 19 分 宜野湾市消防本部から消防、救急車両 11 台が出動

午後 2 時 20 分 伊波洋一宜野湾市長が市内で普天間基地返還要請のための訪米行動の報告中、事故の知らせを受ける。市長は報告を中断して現場へ直行

午後 2 時 25 分 消防が現場到着、消火作業開始。構内放送で学生に退避呼び掛け

午後 2 時 40 分 火災鎮圧

午後 2 時 50 分ごろ 米軍が大学前の道路を封鎖。
墜落のニュースを知った市民らで現場が混雑

午後 4 時 30 分 本館に入ろうとした渡久地沖国
大学長らを米軍、県警が制止。渡久地学長「強く
抗議」。宜野湾市議会が地関係特別委員会を招集

午後 5 時 45 分 伊波市長と渡久地学長が会見。
「最悪のヘリ事故」

午後 7 時 20 分 在沖米軍の最高責任者であるブ
ラックマン四軍調整官がキャンプ瑞慶覧で記者団
にコメント発表。「不安をもたらし深く遺憾」

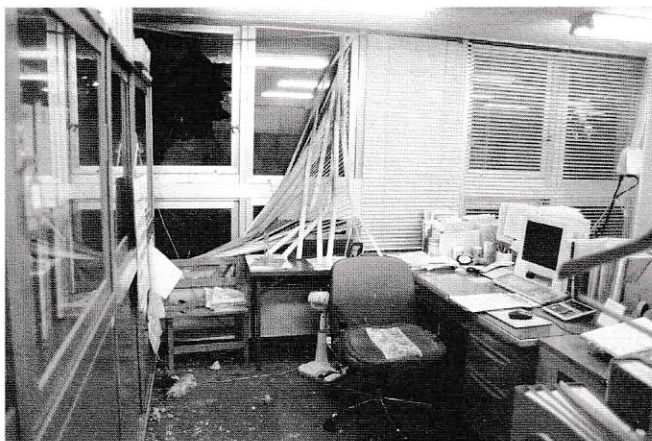
午後 9 時 四軍調整官らが県庁を訪れ、牧野副知
事に謝罪

午後 11 時 嘉数防衛政務官らが同副知事に謝罪

午後 11 時 45 分 沼田沖縄大使が同副知事に謝
罪

8 月 14 日

沖縄県警の調べで、周辺の住宅地や原野の 18 カ所で
部品の落下を確認。このうち 14 カ所では、破損する
などの被害。被害の内訳は屋根や水タンク、窓ガラ
ス、網戸、ふすまなど家屋の破損が 10 カ所、車両 3
台、バイク 1 台でへこみや傷。



ヘリ墜落の際に破壊された沖縄国際大学の事務室

8 月 15 日

米軍、16 日から始まる撤収作業に向け、午後 2 時 20
分すぎ、防具服と手袋をした米兵二人が機体に近づ
き、焼け焦げた金属性の箱を取り出し運び出した。

関係者によると、フライトレコーダーとみられる。
さらに同 2 時 40 分ごろには、数人の米兵が周辺地域
から回収したプロペラなど飛散部品を、校舎内の一
カ所に移動させる姿も確認できた。米軍が宜野湾署
を通じて、大学側に 16 日以降の駐車場の使用許可申
請を提出していることも判明。また県警の調査で 15
日現在、沖国大周辺マンションなど建物 12 カ所、車
両 24 台、油の飛散などその他 3 カ所、計 39 カ所が
被害を受けていたことが判明。被害は当初、18 カ所
とされていた。

この日、墜落後に自粛していた普天間基地での航
空機の飛行をわずか 2 日間で再開。

8 月 16 日

在沖海兵隊のブロック司令官が宜野湾市の伊波洋一
市長を訪問し、事件を謝罪するとともに、事故機と
同型機以外の飛行を再開したことを報告。市長はす
べてのヘリの飛行停止と普天間基地の閉鎖を求めた。
この日墜落現場では、米軍が大学の許可なく樹木を
伐採し、ヘリ残骸の撤去作業に着手。

8 月 17 日

米軍、沖縄県警が求めていた県警の合同現場検証要
請を正式に拒否。沖縄国際大学米軍ヘリ墜落事件対
策本部（本部長・渡久地朝明学長）はこの日午前、
撤去に関する協議を行い、「米軍ヘリ機体などの搬
出に抗議する」声明文を出し米軍の対応を批判した。

防衛庁、在沖米軍司令部に対して、再発防止策が
講じられるまで普天間基地におけるすべての航空
機の飛行停止を求める。

8 月 18 日

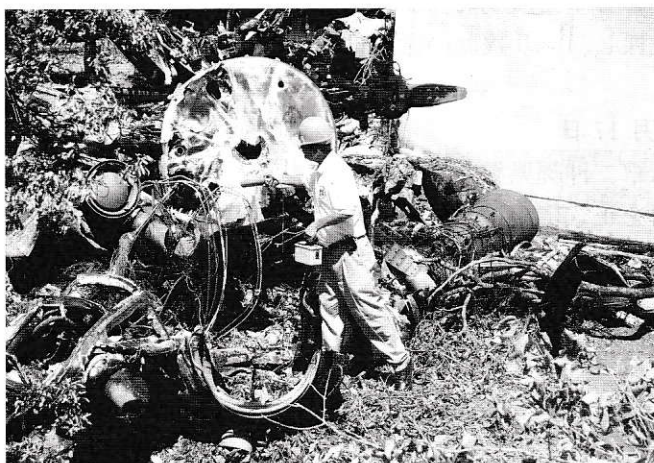
宜野湾市の伊波市長が上京、関係省庁を訪れて面会
を求めるも、小泉首相は夏休みを理由に会わず。
同日午後、ボリビア訪問中だった稲嶺恵一沖縄県知
事が予定を繰り上げて急遽帰国。東京にて同じく小
泉首相に面会の意思を伝えるも同じ理由で実現せず。

沖縄県警、午前から墜落現場やヘリが衝突した一号館
（本館）内で、事故機以外の現場検証を開始。合同現
場検証への同意を米軍が正式に拒否したため、機体や
部品には一切触れることができず、写真撮影や位置確
認にとどまる「異例の検証」を余儀なくされる。17
日までに確認できた被害は建物 13 棟、車両 30 台、沖

国大構内に設置されている光ケーブル1本の計44件に上った。今後の調査で被害総数は拡大する可能性がある。

8月19日

米軍、午後2時までに、同大構内での機体回収を終え、13日の事故発生から六日ぶりに墜落現場封鎖を解除。その後、県警が初めて墜落現場を検証。県も立ち入り、放射能を含めた環境調査を行う。沖国大側は「安全性が確認されるまでの措置」として那覇防衛施設局に現場の囲い込みを要請、現場にフェンスが設置。県警の現場検証のあと、県文化環境部環境保全課（嵩原安洋課長）などが土壌調査。米軍が墜落事故現場で放射能測定をしていたことが疑われ、宜野湾市の要望もあったため、放射能汚染の可能性も否定できないとして実施。放射能測定とともに、水銀、ヒ素、カドミウム、鉛などの有害物質についても国の環境基準を超えていないか調べる。



測定器らしきものを手に調査する米軍

宜野湾市、墜落事故で精神的にショックを受けた市民らの心理面のケアを17日から開始。物的被害を受けた市内14世帯のうち、店舗などをのぞく10世帯34人に対する訪問調査を実施した。このうち、専門的なケアが必要と判断されたケースについては、臨床心理士、さらに心療内科につなぐ。臨床心理士は、那覇防衛施設局から派遣される方向。「夜眠れない」「物音に敏感になった」「二やせた」という訴えのほか、事故後、現場を管理下に置いた米軍の対応にも「眠れない」という訴えなど二次被害も確認された。

宜野湾市、9月5日に抗議の市民大会を開く方向で調整に入る。

8月20日

北中城村議会の臨時議会は、普天間飛行場の早期返還と辺野古沖移設「中止」要求を盛り込んだ抗議決議と意見書案を全会一致で可決。「再考」「見直し」ではなく「中止」まで踏み込んだ意見書は県内自治体で初めて。

米軍が現場への有害物質流出の有無などについて情報公開していないことに対し、住民や大学関係者から「米軍は危険だからあんな防護服を着用したはずだ。何の説明もないのは異常」などと不安やいらだちの声。沖国大総合文化学部のクレイグ・ジェイコブソン教授は、米軍が事故直後、放射能測定機と思われる機材で作業中の場面を見ており、さらに英語で「放射能」を示す「radioactivity」を口にしていているところを聞いたという。同教授は「たとえ米軍が調査しようと、その結果は信用できない。大学独自に調査をすべきだ」と訴えた。

8月21日

沖国大の米軍ヘリ墜落事件対策本部が事故後初めて同大の全教職員を対象にした説明会を開催。250人が参加。対策本部は事故後の経過報告と今後の補償問題などについて説明。出席者から「日本政府からの謝罪はないのか」「学長に直接、東京などに抗議文を持って行ってほしい」などの質問や要望が相次ぐ。終了予定の時刻になっても手を挙げて発言する教職員。「大学の存続を懸けた問題だ。絶対にヘリを飛行停止にしないでほしい」。説明会は終了と同時に緊急抗議集会に。総合文化学部のピーター・シンプソン講師が沖国大に墜落したCH53Dが各地で墜落していることを調査し報告。総合文化学部の石原昌家教授が「基地を閉鎖させ、日本一安全な大学にしよう」と呼び掛けると、職員、臨時職員もマイクを手に声を上げた。

この日、米軍海兵隊は、事故後一時停止していたヘリの飛行を再開。これに関して沖縄県や宜野湾市に事前の通告はなかった。

8月27日

稲嶺知事、ようやく小泉首相と会談。首相は知事の要請に対し「関係省庁とあらゆる対策を講ずる」と述べたが、現場を見てほしいという要望に関しては具体的な返答はなかった。

（写真はすべて沖縄国際大学提供）

墜落～もうひとつの恐怖

恐れていた事故がついに起きてしまった。数十ヶ所に飛散したヘリの破片で、奇跡的にも民間人の死傷者は出なかった。しかし、そのような目に見える被害だけで、今回の事故を判断するのは危険だ。



今回の米軍ヘリ墜落事故では、墜落直後から現場の沖縄国際大学とその周辺道路は、米軍の完全な管理下に置かれた。米軍以外誰も立ち入ることのできない現場検証で、ある一部の米軍関係者の様子が明らかに奇異に映った。防毒マスクのようなものを付け、放射能測定器のような機器を墜落したヘリの残骸に当てている、そういう写真があったのだ。墜落したヘリに何らかの有害物質が積まれていたのではないかという憶測が飛び、県や宜野湾市はデータの提出を求めたが、米軍は返答を先延ばしにした。そして事故から三週間後の9月3日になってようやく、「事故機には放射性物質の『ストロンチウム90』を含む装置があったが、事故後にほとんど回収し、現場に放射能汚染の痕跡はない」と発表した。

問題のストロンチウム90は、ヘリの回転翼に付いている安全装置と「氷結探知機」と呼ばれる機器に使われていた。米海兵隊は、墜落現場で放射能測定器を使い、これらの機器が入った6個の容器のうちの5個を回収した。残りの1個は、ヘリが炎上した際に気化した可能性が高いということだ。

米軍側は「焼失した量は人体に危険性はない。胸部エックス線撮影での照射に比べても、かなり少ない」と説明する。しかし専門家の意見はこれとは異なる。

曰く「ストロンチウム90は劣化ウランより放射線の量のはるかに多い。燃えて微粒子になったストロンチウム90を吸い込めば体内被曝の危険性もある。エックス

線撮影のように外から放射線を浴びるより危険度は高く、安全とは片付けられない」。

この放射線汚染疑惑を目に見えない恐怖とすれば、この事故から派生したもうひとつ別の「恐怖」もある。

那覇防衛施設局は、去る9月3日に地元住民へのボーリング調査に関する説明会を行い、これをもって地元への説明責任は果たしたとの判断から、中断されていたボーリング調査に強行に踏み切った。この説明会は参加者を200人に限定した、いわば「アリバイ作り」のためのもので、墜落から間もないこの時期にあえて強行手段に出たことは、防衛施設局の焦りとも受け取れる。

これらの動きは、無論今回の墜落事故をきっかけに、普天間基地の早期返還（すなわち辺野古への速やかな移設）を日米双方から求められているからだ。しかし、この拙速な動きが、逆に県民の不信感を増幅させている。

最新の世論調査では、辺野古への移設を支持すると答えたのはわずか6%にすぎなかった。しかも、普天間基地は無条件で返還し、国内外へその機能を移設することを求める意見が81%に達している。辺野古移設は、県民の気持ちの中ではすでに破綻しているのだ。

普天間を返還するために辺野古に基地を造る。その本来の目的は、普天間基地の危険を除去することだった。しかし、その代替としての辺野古移設は、環境アセスメントだけでも3年、さらに埋め立てに9年かかると考えられている。そこから本体工事を行って、完成には早くても15年から16年。この期間、普天間をそのままにしておくことがいかに非現実的か、今回の事故でよりはっきりしたはずである。誰がどう考えてもおかしなこの計画を、しかし日本政府と沖縄県は頑なに継続させようとしている。

ボーリング調査決行当日、那覇防衛施設局は、辺野古からはるかに離れた沖縄本島南部の馬天港から調査船を出発させた。現場まで1時間もかかる場所から、である。

いったい那覇防衛施設局は何を恐れているのか。その答えは明らかだろう。今回の事故を最も「恐がって」いるのは、彼らに違いない。

（酒井哲哉／沖縄環境ネットワーク事務局）

・写真は沖縄国際大学提供

「米軍ヘリ墜落事故に抗議する宜野湾市民大会」に参加して



台風で一週間遅れでの開催となった9月12日、宜野湾の空は晴れ渡って暑かった。開始時間の2時にあと30分というところで、会場の沖縄国際大学にほど近い交差点はすでに大渋滞となっていた。ワゴン車の後ろに積まれたプラカード、帽子とタオルで「完全武装」した軽自動車のファミリー、黙々と歩道を歩く大勢の人、人…。

車を駐めるのに手間取り、会場にたどり着く途中で2時を迎えてしまったが、沖国大への歩道は、まだ切れ目なく参加者が歩いている。やがて、すっかり有名になってしまった本館の黒く焦げた壁が見え、その先のゲートから参加者たちがグラウンドへと吸い込まれていく。

会場の沖国大グラウンドはすでに満杯状態だった。校舎の通路の部分はもちろん、仮設ステージを見渡せる場所はどこも人で埋まっている。ステージではすでに伊波洋一宜野湾市長の話が始まっていた。当選してからの一年、この革新系市長は、「普天間基地の5年以内の返還」を打ち出し、それは多くの人に「非現実的」と冷ややかな目で見られ続けていた。

しかし、実際に事故が起きたあと、この目標を笑うものは誰もいない。それは「どうあっても実現させねばならない」ものとして、いま目の前にある。

集まった人たちは、手作りのプラカードやメッセージボードや旗を掲げて、市長のメッセージに拍手を送る。起こったことは不幸だが、そこから派生した市長と市民とのある種の一体感は、行政と市民の関係として幸福であるように見えた。

市長のあとに、市議会議長、当事者となった沖国大の学長、そして市民の代表（小学生から大学生まで、それに自治会、青年会、婦人会、老人会の各代表など）が次々と壇上に立ち、それぞれの思いを訴えかけた。最後に抗議決議が採択され、2時間以上に渡る市民集会は終わった。

不謹慎を承知で言えば、大会の空気は明るかった。それにはいくつかの理由があるだろう。動員をかけられたお仕着せの集まりではなく、一人ひとりが自らの意志でやってきたこと、共通の目的意識の元に参集したことによる一体感、それに会場で無心

に遊んでいた多くの子供たちの姿…。そのようなものがないまぜになって、あの場の空気を作り出していたのだと思う。

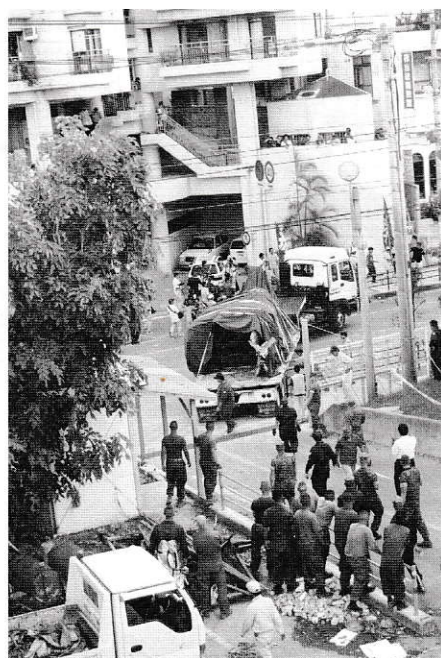
しかし、この集会の意味を思うとき、もっと切羽詰った空気が必要なかもしれないという思いも捨て切れない。冷徹な現実として、今すぐ基地がなくなるとは誰も信じていない。だが、いま声を上げて現実を揺り動かしていかなければ、結局何も動かせなかった9年前の少女暴行事件に抗議する県民大会（8万5千人という空前の参加者があった）と同じことになってしまうのではないかという懸念が頭をかすめるのだ。

ここに参加したことで満足してはいけない。これは始まりに過ぎないのだと強く認識させられた大会だった。



日常が 日常でなくなったとき

(写真はすべて沖縄国際大学提供)



ジュゴン訴訟と

第10回国際サンゴ礁シンポジウム報告

真喜志 好一（沖縄環境ネットワーク世話人）

ジュゴン訴訟で渡米

去る8月4日、沖縄県辺野古における米軍海上基地建設に関わる「ジュゴン訴訟」の裁判所による原告・被告双方からの聴聞会がサンフランシスコで開かれた。この裁判に当初から関わってきた「日本環境法律家連盟」の籠橋輝明弁護士らに加えて、沖縄からも新垣勉弁護士、原告団体である「ジュゴンネットワーク沖縄」事務局長の土田武信氏、個人原告である東恩納琢磨氏の三名がこの聴聞に出席するため渡米した。

「ジュゴン訴訟」については、本通信の25号にその概要を書いたが、訴訟の枠組みを再録しておく。

要するに、この海上基地の建設は、米国の「国家歴史遺産保存法（NHPA）」に違反しているという訴訟である。この法律は、アメリカが国外で行う活動で、「いかなる文化財も米国は侵してはならない」と定められているという。ジュゴンは日本の文化財保護法で天然記念物に指定されており、捕獲や生息環境を乱すことなどが禁じられている。

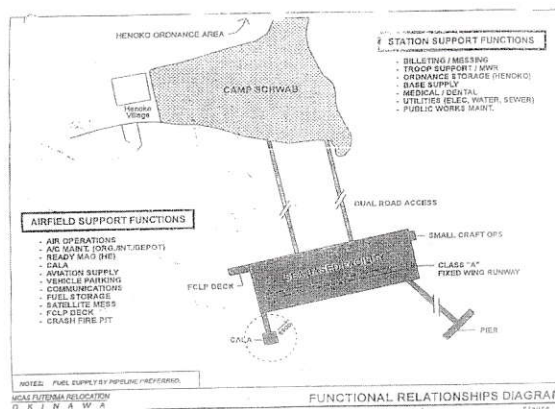
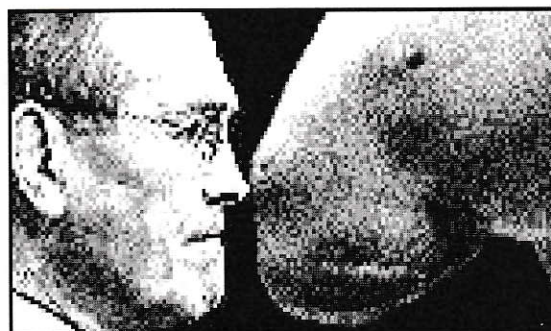
辺野古海上基地計画について、米国防総省がまとめた97年9月29日付の「運用構想」（以後「97年OR」と表記）を証拠として提出している（右の図）。

さて、97年ORには、ジュゴンの保護政策について何の記載もない。それで、「国家歴史遺産保存法」に従って、ジュゴンへの悪影響を回避するための方策を示すように求める裁判である。つまりは米国に海上基地建設の断念を迫る裁判なのだ。

これに対し、被告であるラムズフェルド米国防長官側は「1972年の沖縄返還以降は、日米地位協定によって日本政府が基地を造って提供するのであるから、辺野古海上基地建設にアメリカ政府は関与していない」と主張している。米政府の「関与の有無」が第一の争点である。

パソコンでTVを見る環境にある方は、下記の琉球朝日放送（QAB）をご覧ください。

<http://www.qab.co.jp/01nw/04-03-01/index6.html>



聴聞会の様子

帰沖したメンバーの報告によると、ラムズフェルド長官側の「海上基地は日本政府が作るのもアメリカ政府は関与していない」との主張に対し、裁判長は「使うのはアメリカ政府ではないか？」と問い返したという。

またこの聴聞会について報じた「サンフランシスコ・クロニクル」紙は、ジュゴンの保護策について裁判長が「アメリカの法律を適用するのはおせっかいではないか」と問い、「米国の法律を米国政府に守らせるのだ」と原告側のモロ弁護士が答えたと締めくくっている。

証拠提出を延期し、答弁を撤回した米政府

アメリカ国防総省が作った97年ORについて、被告側の主張は、「既に反古（ほご）になっており、2001年POR(Preliminary Operation Requirement)に代わっている」ということであった。それで、裁判所も原告も2001年

POR の裁判所への提出を求め、8 月 21 日までの提出が約束された。しかし米国政府側が 2 週間の期限延期を申し立て、裁判所もこれを認めたため、9 月 3 日に期限が変更されていた。

裁判所には 2001 年 POR と、2004 年 9 月 3 日付 Joint Committee（日米合同委員会）の「覚書」とが提出されているようだ。（以下——間は増田尚弁護士訳）

——2001 POR は第 847 回合同委員会（2001 年 3 月 8 日）で確認されたものであるが、合同委員会の議事で日米両国に関連するものは、双方の同意がない限り公開しないことになっており（第 1 回合同委員会でそう決めたとも記載されています）、従って 2001 POR について、本件を審理している裁判所以外に開示してはならないとの意見を提出したのです。それと関連して、メーリングリストでお伝えしたとおり、2001 POR に関係した答弁はすべて撤回して、修正した答弁書を提出しました。——

さて、2001POR に関係した答弁を撤回した被告側の主張は、「国防総省がまとめた（浮体式をイメージした）97 年 OR を日本政府が無視し、2001 年 7 月に埋立方式に決めた」という単純なものになった。「使うのはアメリカ政府ではないか？」と問い返した裁判長が、辺野古海上基地建設計画への「米国政府の関与の有無」についてどのような判断をくださるでしょうか。「米国の関与がある」との判断が出されることを期待している。

第 10 回国際サンゴ礁シンポジウムでの NGO の活動

6 月 28 日から 7 月 2 日まで沖縄で開催された「第 10 回国際サンゴ礁シンポジウム」に、前述のジュゴン訴訟の実質的なリーダーである米国の NGO「生物多様性センター」のピーター・ガルビン氏と所属の弁護士ら 6 名が参加した。

「ジュゴンネットワーク沖縄」が展示ブースを確保し、「沖縄ジュゴン環境アセスメント監視団」とロビー活動をとるためである。これに関しては地元の民放である QAB（琉球朝日放送）が詳細を伝えている。以下は関連報道の URL である。

http://www.qab.co.jp/01nw/04-06-28/index.html	シンポジウム報道
http://www.qab.co.jp/01nw/04-06-28/index2.html	27 日の辺野古海域ツアー
http://www.qab.co.jp/01nw/04-06-30/index3.html	サテライトミーティング
http://www.qab.co.jp/01nw/04-06-30/index5.html	辺野古ツアー参加者の声
http://www.qab.co.jp/01nw/04-07-01/index5.html	米政府役人が辺野古ツアーに参加して
http://www.qab.co.jp/01nw/04-07-02/index2.html	シンポジウム後の報道
http://www.qab.co.jp/01nw/04-07-03/index.html	閉会式と辺野古ツアー

サテライトミーティングや、3 日間にわたる辺野古ツアーを行いつつ、世界 87 の国と地域から 1370 人の参加者（沖縄タイムス 7 月 3 日報道による）のうち 889 名から、米国大統領、内閣総理大臣、沖縄県知事、名護市長あての辺野古保護署名を集めた。

—— 辺野古海上基地計画の撤回を求める署名 ——

私は、清澄なサンゴ礁の海を埋めて、アメリカ海兵隊の海上航空基地を建設する計画があることを知り驚いています。1997 年 12 月 21 日の名護市民投票の民意（過半数が建設に反対であった）に従って辺野古海上基地計画の撤回を求めます。ジュゴンが棲む海を守り、サンゴ礁の回復を見守っていくためにも貴職らがご尽力されることを切に希望します。（第 10 回国際サンゴ礁シンポジウム参加者）

我々 NGO の参加者による大会の締めくくりの活動は、大会宣言文を修正するためのロビー活動であった。サンゴ礁を破壊している原因に「埋立て」を明記することになり、「これ以上破壊しない」という決意も加わり、沖縄の乱開発をとめる「沖縄宣言」が採択された。

最後に、上記 2 つの活動が、昨年 3 月に沖縄で開催された「軍事活動と環境に関する第 1 回国際ワークショップ」から芽生えた種をまいた成果であることをご報告しておきたい。

林道が生物多様性の森を壊す

照屋久子（沖縄環境ネットワーク世話人）

今から十数年前のこと。

夕闇がせまる頃、本島最北部の国頭（くにがみ）村奥間集落から与那覇岳に向って登り始めると、林道沿いの大木にヤンバルクイナの気配を感じた。ヤンバルクイナはねぐらになる大木の枝で身を丸めて休む。半地集落から登って行くと人家の見えなくなった浜林道沿いに一本の大きいハゼノキがあった。実のつく頃、ノグチゲラがせわしく通ってくるのを眺めているのが楽しみだった。

山頂に伸びる旧林道は樹木に覆われ、でこぼこの砂利道に伸びた枝や生い茂る草は生気に満ちて、「多様性の森・山原（やんばる）」の入口にふさわしい情景を形成していた。道沿いには、山原でしか見ることができないシダや緑輝く苔、湿った樹陰に可憐に咲き誇っているピンクのハシカンボクやコバノミヤマノボタン、寒い季節には、サクラツツジやヒメサザンカ、マンリョウやセンリョウなどの黄や赤の実や四季の草木が森の豊かさを演出する。緑葉の中に花を咲かせているキンギンソウを掻き分けて沢に降りると川石の上では真っ白いサツマイナモリの花々が水しぶきをうけてゆれていた。

まだ暗く寒い早朝、山頂付近の林道にたたずみ、遠く海岸沿いの人家の灯りを眺めると、人恋しくなった。その頃の山原は森や沢が遠くまで連なり、深く雄大であった。

林道の茂みからヤンバルクイナが飛び出て車の前を横断する。月夜に川の上流域でキャンプをすると、隣のイタジイの木でヤンバルクイナが鳴き、キラキラ輝く谷間の森から連呼する。朝、枯れかかった高い木にノグチゲラが飛んできて枝に登ったり、グルリと廻ったりと木をつついて採餌をする。ドラミングが森に響きわたる。この当たり前だった光景を今は見ることができない。

90年代半ばに開通した「大国（おおくに）林道」が、最も希少種が豊かな山原の中央脊梁山地を35kmも貫き、カエルやイモリの産卵場であり他の野生生物にとっても重要な生息地である沢の上流を分断した。清流が流れ、照葉樹林に覆われて真夏でも暗く涼しかった湿潤な沢を、林道建設の残土で埋めてセメント張りにした。ヒューム管を埋設して落差を造り、古代から生き延びてきた山原の生き物を排除していった。人の侵入を許さなかった深山に大橋を架け、大勢の人や車を招き入れてきた。車の進入は谷間に捨てられたゴミだけではなく、ヤンバルクイナや稀少生物を捕食する猫や犬まで持ち込ませ、マングースの進入を許し、飛べないヤンバルクイナや野生生物達を危機に追い込んで

いる。特別天然記念物、希少種、絶滅危惧種、二百種の固有種が南北30km、南西10kmのせまい生息地で辛うじて生き延びてきた奇跡の森に、17年の歳月を費して1994年に大国林道が開通し、さらに延長道として14kmに及ぶ北進道路が1998年に完成。山原の森は50kmの広域基幹林道で南北に分断されたのである。その後も次々と林道は建設され、森は熱く乾燥し深山にはガードレールが並んでいる。

1972年の日本復帰後、山原を縦横に走る林道建設は200km余にも達する。昼夜となく車が進入してカエル、リュウキュウヤマガメ、イモリなど林道を渡る小動物が車の犠牲になる。ヤンバルクイナだけに限らない。U字溝も取り付けられて、イモリやヤンバルクイナの雛などの小動物が落下し固体数を減らしている。雨の日の夕方、二頭のヤマガメを拾い上げたが、どこに放せば安全なのか。立ちふさがり崖のようなのり面も小動物には恐怖となる。今も林道が山を削って伸び続け、野生生物の生息地が減り続けている。

林道建設によって姿を消したのは動物だけではない。林道沿いの草木も一掃されて赤土ののり面に変貌する。ようやく自然植栽によってシダや草木が芽吹いたのり面も、再び吹き付け工事によってどこも代わり映えない移入植物が植え付けられる。開通当時道沿いにあったヤンバルクイナの止まり木やノグチゲラの営巣木・採餌木も乾燥した風で朽ち果て、今では一本も見つけることはできない。

林道建設は国庫80%の効率補助金に依存して建設され、生物多様性を誇る山原の三村（国頭・大宜味・東）の林道建設密度は全国平均を上まわっている。沖縄県は地域振興・過疎化防止と「癒しの林道」として、これからも建設を続ける計画である。これまでの林道建設に際して環境アセスメントを実施した例はない。自然保護団体や専門家との意見交換やシンポジウムも開催されず、人が立ち入らない深山で延々と建設されてきた。

今年8月、「琉球諸島を世界自然遺産にする連絡会」が国頭村の林道の視察会を開催した。山原の深山で自然とのふれあいに期待した参加者は、イタジイの森が大型機械で切り壊され、谷間に土を転がしながら切り開かれている工事に驚き衝撃を受けていた。完成し舗装されたばかりの林道は数か所崩壊している。建設費ばかりでなく補修工事にも莫大な税金が使われることに憤りを覚えた。これらの費用は莫大な赤字国債で賄われ、今の若者達に引き繋がれる。

のり面だらけで木陰のない林道は熱く、舗装道路からの照り返しも強く体調を悪くする者もいた。山原を世界自然遺産にしたいとする人たちからは「沖縄で最も価値のある自然が壊され、世界遺産が失われる」と危機感を募らせていた。

その後、舗装や改良工事がされず旧道のままの「楚州（そす）林道」で自然観察を楽しんだ。周りの林から涼しい風が絶えず吹き、道沿いにはイタジイ・イジュなどの大木が木陰をつくって心を和ませる。草木の香りが漂い、腐葉土や靴底の草や小石の感触が気持ち良い。谷間から国の特別天然記念物であるノグチゲラの声が聞こえ、採餌中のアカヒゲ（国・天然記念物）も姿を見せてくれた。イノシシの採餌痕もいたる処に見られる。樹林に覆われた林道は野生動物の大切な餌場であり生息地なのである。小さい沢の滝つぼに降りて顔を洗い、のどを潤す。先ほどの舗装された林道とはなんという違いだろうか。人々の顔はやさしくなり、安堵感に満ちている。野生動物と共存できるこの道こそが人々が求めている癒しの道なのである。この道を莫大な費用をかけて拡張し舗装する必要があるのだろうか。

やがて草地の広がる道に座り込んで意見交換会をした。不要な林道工事を止めて、山原の自然を保存すべきとの意見が次々に出された。県民は山を壊しヤンバルクイナや稀少生物を絶滅に追い込む林道建設を望んでいない。厳しい

生活の中で森と共存しながら祖先が残した生物多様性の宝の森を若者に引き継ぐべきではないか。

鹿児島県の屋久島では世界自然遺産として登録された後、島民の6割が経済効果を受けながら自然との共存を模索しているという。マングローブを保全している東村の慶佐次川では、年間10万人以上の高校生や観光客が県外から訪れる実績がある。野生生物を絶滅に追い込む公共工事から、自然を回復させる公共工事に展開できないだろうか。

山原の山を保存して次回には世界自然遺産として推薦させたい。持続可能な豊かな森として子々孫々まで残していく具体的な方法を見つけるべきである。

今年来沖したアメリカの「生物多様性センター」のピーター・ガルビンさん（山原の自然を保護するために米国で提訴をしている）らは森を視察キャンプした後、「世界に山原ほどの生物多様性の森は他にありません。世界の宝です。豊かな森と生活できる事に誇りをもってください。私たちも山原の自然を守る為に全力を尽くして裁判を勝ち抜きます」とにこやかに話してくれた。

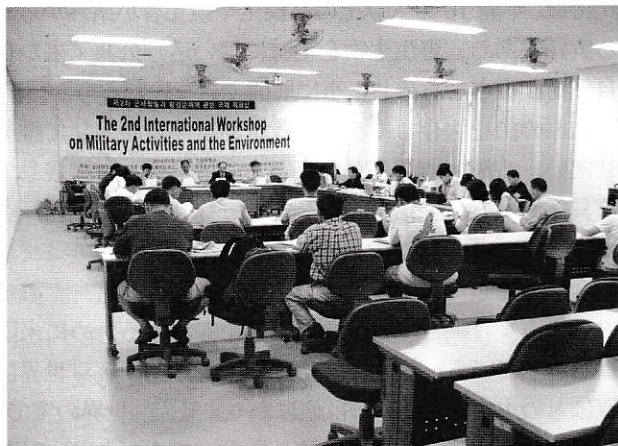
建設中の国頭村・謝敷林道（2003年）



「軍事活動と環境に関する

第二回国際ワークショップ」報告（1）

砂川 かおり（沖縄環境ネットワーク世話人）



2003年に沖縄で開催した「軍事活動と環境に関する第一回国際ワークショップ」の成果を踏まえ、去る8月18日～20日に、韓国京畿道で「第2回軍事活動と環境に関する国際ワークショップ」を開催しました。世界の5ヶ国、韓国、日本、フィリピン、アメリカ、ネパールからNGO、法律家および研究者たちが参加し、米軍基地が存在している国々及び地域における環境問題やその解決に向けて、情報や経験を交換し、議論しました。

1日目には、韓国の米軍駐留地からの地域別報告、米軍駐留国からの国別報告、軍事活動に関する環境政策とその批判的分析に関するセミナーが行われました。2日目には、軍事活動に関する環境調査法、軍事活動に関する環境問題解決のための法的手法（地位協定問題、駐留国及び米国における訴訟）セミナーが行われました。3日目は、米軍の再編化計画によって米軍基地建設予定地になっている平澤（ピョンテック）、今も爆撃訓練が続いている梅香里（メハンリ）を訪問し、夕方には、梅香里の公民館で住民の方の主催する交流会に参加しました。

ワークショップでは、水原宣言と行動計画が採択されました。行動計画としては、下記の3項目が採択されました。

1. 来年、第3回目のワークショップをフィリピンで開催する。
2. 2007年に米国において、大規模な国際会議を開催する。
3. 国連環境計画のプログラム、「21世紀最初の10年のための、環境法の発展と周期的な評価のためのプログラム（「モンテビデオ・プログラム3」）の一環とし、今年末までに実施が予定されている、軍事分野

の環境規範の適用に関する世界的な調査に対して、具体的な行動をとる。

2005年2月21～25日にケニアのナイロビで開催される国連環境計画の管理理事会では、この調査の中間結果が報告されることになっています。

今回は、1日目の韓国からの報告を中心に掲載します。

1日目：8月18日（場所：水原大学）

主催団体代表による挨拶の後、各セッションが行われた。

セッション1：韓国の米軍駐留地からの地域別報告

- ① 梅香里 報告者：全晩圭（米軍の射爆場の閉鎖を求める梅林里対策本部代表）

梅香里での、半世紀にもわたる米軍の爆撃演習からの被害が報告された。爆撃演習の振動や騒音による健康被害、誤射やヘリ事故によって住民が死亡したケースも報告された。最近まで、これらの被害に対して何の補償も受けられなかったが、裁判によって、住民側が勝訴し補償を受けられるようになった。その他に、沿岸域の魚介類の減少も報告された。

1980年代後半、「暴動」と報道されていた住民の生存権を賭けた闘いは、その後、全国民の支持を得て、2002年には陸上射爆場を閉鎖させた。沖合いのノン島の爆撃演習場も来年には閉鎖される。射爆場返還地に平和公園を建設する計画が住民主導で進められている。

- ② 平澤 報告者：キム・デオリ

（韓国農民連盟ピョンテック支部代表）

平澤は韓国でも有数の穀倉地帯である。平澤にある2カ所の米軍基地によって占領されている土地面積は450万坪で、駐韓米軍の34%の1万人強が駐留している。米軍基地の再配置によって、在韓米軍基地が平澤に集まるという計画があり、それによって、394万坪が拡張され、平澤の米軍基地は1000万坪近くの規模になる。

4カ所の村、500世帯が住環境を奪われ、その周りの1500世帯が農地を奪われることになる。政府は、住民に補償を行うと言っているが、十分な内容かはわからない。

平澤では、航空機やヘリの騒音問題が深刻で、現在、住民が訴訟を起こしている。基地からの大量の油漏れ事故もある。恒常的な問題は、農地に通っている老朽化した高压の送油管で、そこから油が漏れたり、漏れる危険性がある。

米軍用地の拡大によって、農民たちは生活環境を奪われ、さらに米軍たちによる犯罪、騒音、基地汚染による被害が増し、住民の生存権が侵されることが予測されるので、農民たちは必死に反対運動を展開している。

③ パジュ 報告者：キム・クアンチョル

(パジュの緑-環境のための市民連合代表)

1973年に駐韓米軍の移動があり、その後、韓国軍が入って来て、基地を使い始めた。1973年以降、パジュ射撃場で住む人々は、非武装地帯で農業を始めた。多くの穀物が非武装地帯で作られている。民主化が進んだ現在でも、非武装地帯に出入りしながら米軍基地に反対したという理由で、住民は政府や米軍によって人権侵害を受けることがある。一般人が近づかない射撃場なので、集会もできない特別な地域である。強制的な収用によって、農民が農地を奪われたケースもある。

ストーリー射撃場は強制的に買収された基地である。ストーリー射撃場は南北朝鮮の境界線に位置し、全長11.6kmのフェンスで囲まれている巨大な基地である。軍事活動による環境汚染や生態系破壊などで、農民たちは農地を失っている。射撃と爆撃によるストレスで動物たちが死亡するケースもある。また、基地の中には、貴重な文化財があるにもかかわらず、十分な調査と保護策が取られていない。住民は、韓国政府と米軍に環境影響評価などを要請している。インジン川の対岸にある戦車の射撃場でも、家畜への被害や高句麗時代の遺跡の破壊など同様な被害がある。

セッション2：米軍駐留国からの国別報告

フィリピンからは、アレクサンダー・ラクソン弁護士(軍隊の有毒物質被害者のための弁護団団長・基地の環境浄化のためのフィリピン国民対策会議)から、クラークとスービック米軍基地跡地での有害物質による汚染被害と訴訟の現状について、沖縄からは、真喜志好一氏(沖縄環境ネットワーク)より、8月13日に起こった沖縄国際大学におけるヘリ墜落事故及び事故後の米軍と日本政府の対応についてと、辺野古の米軍基地建設問題とジュゴン訴訟について報告がありました。

セッション3：軍事活動に関する環境政策とその批判的分析

①報告者：チョイ・バンチュル氏 (韓国環境省)

駐韓米軍の活動は、韓米地位協定によって決められている。1964年に締結された韓米地位協定には、環境保護の規定がなかった。米軍基地内で米国が全ての管理権を持つこと、返還時に土地の原状回復が免除されることが規定されていた。

2000年、韓米地位協定改定が協議されている時に、米軍の事故が起き、2001年に環境に関する規定を地位協定に加えることになった。米軍が、環境保護の必要性を認めること、健康の重視、韓国の国内法の尊重が盛り込まれた。

韓米地位協定で定められた環境合意議事録(以下、「議事録」)は、2001年1月18日に合意され、地位協定と同様の効果を持っている。駐韓米軍が自ら策定した環境管理基準(Environment Government Standard; 以下、「EGS」)を2年毎に改定すること、米国と韓国でより厳しい方の環境基準を適用することなどが決められた。

在韓米軍基地の運営に関して協議するための、米国政府と韓国政府で構成される韓米合同委員会がある。その下に14の分科委員会があり、その一つが、環境分科委員会。合同調査などは、境分科委員会が行っている。

「環境保護に関する特別協定覚書(以下、「覚書」)」も2001年に締結された。この規定ができる2000年以前には、米国政府との協議後にしか調査できなかったが、この覚書を根拠にして、米国に正式に調査を要求できるようになった。

「環境情報の共有及びアクセスの手続き(以下、「手続き」)」は「覚書」を具体的にしたもの。汚染などにより危険が発生した場合の通報方法について規定している。これに基づいて、非常時の連絡網ができている。事故時に通報する方法が2つある。まず公共の安全や人間の健康に実質的に危険がある時には、すぐに通報される。さらに48時間以内に文書で通達する。2つ目は、お互いに協議する方法。原則として基地内は米軍が、基地外は韓国側が対応することになっている。場合によっては、基地内の汚染調査に韓国側が参加することもある。そして実務グループは、(その結果を)環境分科委員会に報告することになっている。必要ならば韓米合同委員会にも報告する。マスコミに資料が提供されるためには、環境分科委員会の承認が必要となっている。もし、韓国側の住民が汚染を発見したら、自治体に報告し、その自治体は、各米軍基地、韓国の環境分科委員会に報告する仕組みになっている。同様に米軍が汚染を見つけた場合も、環境

分科委員会の韓国側のメンバーに報告して共同で取り組むことになっている。

「手続き」付属書 A には、基地返還時の原状回復に関する規定がある。現在、返還に際して、環境アセスメントを実施することになっている。返還（供与）敷地は、環境汚染共同調査後に汚染が発見された場合には米軍が、供与時には韓国側が浄化後、返還（供与）することを定めている。現在、環境汚染共同調査と浄化をするためのチームが組織されている。

EGS には、在韓米軍の環境基準が記されている。内容は、廃棄物や水質などの 18 分野から成る。2 年毎に改正される。現在、米国側の改正案を韓国側が検討している。

主な環境汚染例は、1998 年に生じた、メディスン米通信基地での油漏れ。冬に油漏れがあったため、翌年の春になってから発見された。この汚染では、米軍が浄化を行っている。

また、2001 年、ノクサピョンヨクで油漏れが起こり、地下水が汚染された。この汚染により住民が被害を受け、3 年間の調査を両政府で行った。3 年間の調査で、汚染の原因が米軍基地であることが突き止められた。

現在、汚染については、米軍基地内は米国政府、基地外は韓国政府によって浄化されることになっている。韓米地位協定の改定によって、韓国政府は浄化経費を、米国政府に請求できる。

②報告者：アレクサンダー・ラクソン弁護士（フィリピン）

フィリピンで環境汚染防止に関する一連の環境法が通過したのは比較的最近であり、80 年代は環境関連の法律はなかった。また、米軍は、米軍基地のすべての管轄権を持っていたので、フィリピンの環境法は米軍基地に適用されなかった。

フィリピンの米軍基地は 1991 年に閉鎖されたが、フィリピン政府が米国政府と訪問軍協定を締結したため、いつでもフィリピンで、フィリピン軍と米軍は共同で訓練をできることになっている。継続的な訓練は、フィリピンに負担を与え続けており、基地があった頃と変わっていない。共同訓練の地域に住んでいる人々は未だに訓練で排出される有害物質で被害を受けている。今も、フィリピンでは米軍の環境汚染に対する法律がない。今後、いかに汚染を予防するかを考えることが必要。

その他に、林公則氏（一橋大学経済学部研究科博士過程）が「環境軍縮」という新しい考え方について、筆者が「在日米軍基地に関する環境政策の分析」について報告しました。

③アン・ミョングン氏

（京畿道韓国環境運動連合事務局長）

韓国政府の米軍基地の環境政策について、肯定的に評価することはできない。在韓米軍の活動によって、環境悪化は続いており、政策や対策も十分でない。

先ほど環境省の担当者から報告された、メディスン米軍通信基地で起こった油漏れでは、その浄化作業に長い時間がかかっている。そして、浄化剤に界面活性剤などが使われており、その河川では、以前、生息していた蜆などが見られなくなっている。

米軍基地の再編成で平澤への基地の移転が計画されているが、ストーリー訓練場は、移転後も演習できることになっている。ストーリー射爆場から平澤までの間には約 200 万人が住んでおり、このような都市地域を通して、運営時の戦車の移動などが、安全性の面でも、環境の面でもどんな影響を生じさせるのかはわからない。米軍基地の再配置計画に関しては、米軍に関する情報が非常に手に入りにくいという問題がある。そのような条件下においては、米軍基地の移転によって発生することが予測される環境問題に対して、より敏感に対処すべきである。

米軍用の韓国縦断送油管は、プサンからピョンテックを貫いてソウルまでの長い距離を縦断している。耐久年数 30 年であるにもかかわらず、32 年経った今でも使用されている。1996 年の米国の専門機関の調査によって、非常に多くの場所で腐食と破壊が生じていることが分かっている。実際、油漏れも起こっているが、まだ十分な対策が取られていない。

制度的な問題としては、汚染された私有地では、油汚染に対する費用を補償するのは、米軍ではなく、韓国政府であるという点がある。また、地位協定は、事後の対処のことだけを定め、事前に環境問題を予防する視点が抜けている。また、広範囲で発生することが予測される環境問題への環境影響調査ができないと言われている。

組織的な問題としては、韓国では米軍の環境問題を専門的に扱う部署や専門家は、存在していない。沖縄県庁などには基地対策室があるが、韓国では行政の中に担当部署を設置しようという市民団体の提案に対して、政府からは返事さえない。韓国と米国で不平等な関係が未だに残っており、米軍による環境問題の予防ではなく、事後の対応、被害を受けた住民がどれほど必死に闘うかによって初めて問題が解決される構造になっている。より良い環境政策を今後作るためには、専門的な部署を設置して資料を蓄積することこそ大事だと思う。（以下次号）

沖縄からコスタリカへ ～平和憲法とエコツーリズムの旅～

ツアー日誌 (3)

晴天のエコツアー

バスで再びモンテベルデの自然保護区に入り、2時間のトレイル散策を行った。今日は天気が良いので楽しみである。さっそく、沖縄の食わず芋の様な葉っぱから、現地のガイドが顔を出す。葉っぱの巨大さが引き立つ。リスが飛び出したり、一本の木に蘭やブロメリアや芋のような葉っぱまで付いていて、どれが本当の木の葉っぱか分からない。巨大なシダ植物が生い茂り、まるで恐竜時代に迷い込んだ場所もある。何でも無いような土の穴が、タランチュラの棲家だったりする。ガラガラヘビの尻尾のような花や、象の肌のような葉っぱ、紅色の茎に深緑の玉がちりばめられた木など、不思議な植物がいっぱいである。

ハキリアリが葉っぱを運んでいる。農業をする不思議なアリで、収穫した葉っぱでキノコを栽培し、それを食料としている。中が空洞で成長が早い木や、花の形が海老に似ている海老植物、蛇のボアに似たつる植物、等々。メンバーに何でも口に入れる人が居て、葉っぱを食べようとして、ガイドから止められていた。ヘリコニアという名の赤い花は、茎の窪みに水をため、そこにボウフラや小さな虫が生息し、そこに小宇宙を形成している。

私が楽しみにしていたケツアールの声はするが、姿が見えない。逆方向から回って来たツアーメンバーの上江洲由美子さんは、しっかり見たそうである。ここで、日頃の行いを反省しても既に遅い。太い蔦にぶら下がり、メンバーの鹿谷さんはターザンになっている。近くの木に鳥のシルエットは見えるが、種類までは確認できない。



2時間のトレイルを終わり、入り口に戻ると、なんとインフォメーションセンターの上の木枝にモンキーが見える。目の前の枝にも瑠璃色の野鳥が見える。すぐ側のハチドリが集まる民芸館にもう一度行ってみる。今日は天気が良い

ので、昨日より良い写真が撮れそうだ。何回もシャッターを切っては、映像を確認する。明るくきれいに撮れた写真もある。細長い嘴の中に、その2倍もある長い舌があり、器用に砂糖水を吸っている。

再度植樹に

トレイル散策が終わり、植樹に向かう。昨日は雨の中で立ち往生したので、晴れてるとはいえ、たどり着けるか心配である。出発に際して高橋さんから、植樹の内容については、現地で下村さんから説明がありますのでよろしくとのアナウンスがあった。昨夜の食事時のメンバーの感想を聞いて、下村さんは多少ナーバスになっているようだ。メンバーは、2日続けてトレイル散策が出来、意見も言っているので、植樹を受け入れている。移動の途中で、急傾斜の道は今日も困難が予想されるので、タクシーに乗り換えるという説明があった。乗り換え場所には数台のタクシーが止まっていたが、メンバー全員が乗るのは無理である。しばらく調整していたが、下村さんから行ける所までバスで行き、降りて歩きます。という説明があった。桜井さんが私に、そこまでして植樹をする必要があるのか、メンバーから何故不満が出ないのだろう、と話し、この植樹が現地ツーリストが準備したオプションツアーであることを説明された。私が、昨夜下村さんに、メンバーから不満が出されていますと話した。

バスは昨日スリップした場所まで移動し、そこから歩いて植樹場所に移動した。500メートル程の近くだったので、すぐに到着し、現地の自然保護団体のメンバーからこの取り組みの経緯と現状、そして今日の作業についての説明があった。メンバーは誰も意見を言わなかったが、十分納得した訳ではなく、消極的に受け入れ、作業に入った。下村さんは、自分が植えたリトルアボガドの木が、どれだけ成長したか、再びコスタリカを訪れて見てください、といって説明を終えた。沖縄の北部・やんばるの自然保護に、日々苦勞されているメンバーにしてみれば、自分の地元の土地に植樹をしたい気持ちはあっても、時間と金を工面して、わざわざコスタリカにエコツアーの実態を勉強に来ているのに、その時間を削って植樹をすることは、得心がいけないことではあっただろう。

コーヒーの木は1メートルほどの高さで、白い花をつけていた。受粉すると実を結び、茎に豆のような実が点々と付く。コーヒーの木のすぐ側にポイントを付けてもらい、そこを20～30センチの深さで穴を掘る。苗を入れて土を被せれば終了である。

例によって植樹は、一人一本の儀礼的なもので、現地の自然保護団体にとっては、我々が支払うオプションツアーの入金のほうが役立つだろう。天気が良いので、短時間とはいえ炎天下での作業で体が火照り、木陰の風が心地よい。

リトルアボガドの木は、露地の炎天下に植えれば、すぐに水分を奪われて枯れてしまう。そこで、コーヒーの木の下に植えて成長させるのであるが、コーヒー園と山のてっぺんまでの裸地では、自然回復の度合いも異なる。コーヒー園はともかく、あの何もかもが剥ぎ取られた放牧用の裸地こそ、どうにかすべきである。

植樹も終わり、バスを降りた所に戻るが、バスが見えない。近くの町まで用足しに行っているようである。つくづく植樹には無駄な時間を費やされる。空には何匹ものコンドルが飛んでいる。君たち、我々は砂漠に放置された難民ではない。

やがてバスが戻ってきて、近くの町で用足しと遅い昼食までの、つなぎのおやつを買う。30 人も人数が利用できるトイレは無く、雑貨店や果物屋、喫茶店風の店等、各自町中を、トイレを求めて歩き回る。下村さんの話では、どこの町にも飲み屋はすぐに出来るそうである。この町にも、アミーゴという、ありがちな名前の店があった。私たちは、おやつにクッキーとトマトを買った。

舗装を拒否する地元の人々

一路アレナル火山に向かう。バスの最後部の座席には伊波先生と山口さん、兼城さんと私が陣取る。連日の強行日程で疲れている山口さんは、大揺れのバスの中でも、ぐちゃぐちゃにバウンドしながらも居眠りをしている。それを見て兼城さんが笑いながら、良く眠れるねと感心している。急傾斜を上り下りするバスのエンジン音が不安定である。上り坂があると学生の乗ったバスが追い越し、先に行ってしまう。運転席の背中にキリストの絵が張ってある。あと一枚張らないと、この急勾配は乗り切れないのでは。

しかし、下村さんによると、この凸凹道も舗装の計画が出たときに、地元の人々が反対したそうである。大型バスが行き交えば、大手資本が入り、自然環境が負担を受けると同時に、利益も持っていかれる危惧がある。不便でも入る観光客を制約したほうが地元の利益につながると考えたそうである。沖縄観光はマストツアーで、500 万人を超える観光客が 1 年で来るが、どこのホテルも経営は四苦八苦である。稼働率が 9 割でも赤字では、少しコスタリカを見習ったほうがよい。

豊かな自然のアレナル湖

山一面を火事のように見せる、赤い花が咲くポロの木が覆っている低い山が左手に見え、やがて人口湖であるアレナル湖畔に差し掛かる。アレナル湖の北西部は風が強くウインドサーフィンの適地である。対岸には、強い風を利用した風力発電の大きな風車が何機も見える。

コスタリカは、自然エネルギーの利用が盛んで、水力発電がほとんどの電力を作り、他に風力発電と地熱発電、そして揚水発電がある。このアレナル湖の水も水力発電に利用され、ニカラグアにもその余剰電力は送電されている。

湖の北西部を回り込む形で、道は南東に進む。左右に販売用の別荘が目立つ。アレナル湖に写るアレナル火山を望むこの付近は道も舗装されており、風も穏やかで、絶好の居住環境である。コスタリカは外国の年金生活者の受け入れを積極的に行っている。インターネットでも日本語サイトがある。大学新卒者の初任給が月額 6 万円ほどで、日本の夫婦の年金生活者の収入でも余裕を持った生活が出来る。

午後の 3 時過ぎに昼食予定のレストランに到着し、それぞれが料理を注文する。ビーフとポークと魚料理が選べる。ガイドさんはポーク料理がお勧めだ。沖縄と同じで豚肉文化だそうだ。最初に数種類の果物が出て、それだけでも結構な量がある。メインディッシュを食べたら本当にお腹いっぱいになった。その後でチーズケーキとアイスクリームとコーヒーがある。ヒギンズさんはその量をクレージーと言っていたが、しっかり全て食べていた。

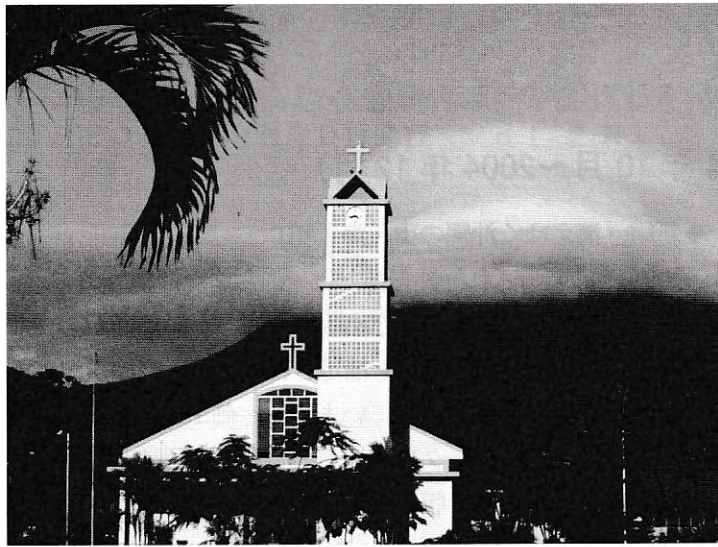
知花さん、上江洲さん、上間さんのおば様連は、旅の思い出、旅は思い出、旅は重いで、ドンドン太る、とはしゃいでいる。最後のコーヒーが、私とヒギンズさんのみであったので、おば様たちもしっかりボーイに要求していた。彼女たちはこのツアーの提案者で、最後に県議会の日程で参加を断念した糸数慶子さんの後援会のメンバーである。知花さんは元農業大学校の校長先生で、上江洲さんは沖縄の地元紙琉球新報に勤めていた、それぞれ知識欲と食欲が旺盛な元氣お婆様である。

ここでもギリギリまで食べたり飲んだりして、またバスに乗り込んだ。コスタリカは美人の国と案内書にあるが、これまでの印象では美男子が多い。特に接客業のボーイ達は、映画俳優の様にさになっている。背丈も我々と変わらないので、圧迫感がない。総じて控えめで好印象である。

コスタリカにスペイン人が入植したときに、彼らが持ち込んだ細菌によって、ほとんどの先住民が死滅した歴史がある。その結果、人口の 90% 以上がスペイン系白人の子孫で、人種的交配はあるが、中南米の他国と違いインディオの割合は極めて少ない。言語的にも綺麗なスペイン語を話すので、多くの学生が語学留学にコスタリカに来ている。

バスが停まったので、どうしたのかと座席から伸び上がると、車の前に動物が飛び出したそうである。降りてみると、アライグマに似たハナグマが道路に出ている。観光客が増え、餌を貰えることを学習したようで、下村さんはこの辺りをハナグマ街道と呼んでいる。

撮影をしていると、いろんな鳥が上空や樹上に見える。逆光で見事なシルエットの撮影ができた。アレナル火山も夕日に彩られ、見事な美しさである。上間さんが寄ってきて、サッとアレナル火山を指差し、「あれなる火山はアレナル火山」ときっぱり言い放った。オオ！お婆様、オネガイ！



タバコン温泉

そこから3時間ほどでアレナル火山の麓のタバコン温泉に着いた。温泉のあるホテルは満員で、我々は近くのホテルに宿泊予約してある。温泉にゆっくり入り、9時から夕食である。新婚の桜井さんは、おそろいのビーチサンダルで、メンバーから冷やかされていた。私たちも一つくらいペアの物を持ってきて対抗すべきか。

この温泉は噴出温度が40度を少し上回るほどで、暖めたり、水で埋めたりしないでも自然のままで楽しめる。吹き出した温水が川となって流れている。打たせの滝や足湯や温泉プールまである。川全体が温泉で、決められた場所を外れて上流や下流に行かないように注意を受けた。日本と異なり、温泉に裸で入る習慣はないので水着着用である。

車移動の連続で運動不足に加えて栄養過多なので、少しエネルギーを消費しておこうと、温水プールで水泳をする。沖縄でも、毎週2時間ほど温水プールで泳いでいるので、何時も使っている競泳用の水着を持参した。簡単に言えば、ビキニタイプで、他の観光客全員がトランク型なので完全に浮いている。恥ずかしいので、さっさとプールに入り、泳ぎだした。

何時もの温水プールは28度で、体温より数段低いですが、ここは40度で体温より高い。これは非常に大きな差で、30分もすると体全体が火照ってきて、息苦しくなる。とても一時間以上も泳げる状態ではない。少し休んで体を冷やす。

プールの一角で、桜井さんは奥さんに水泳を教えている。他の人たちはどうしているのか見回ると、学生たちが打たせの滝からプールの方に移動している。他のメンバーは見えない。もう一度プールに戻り、泳ぎだした。スイミングキャップをかぶり、ゴーグルを付け、競泳用の水着を着た。温泉とはあまり縁のないでたちに、金髪の若い女性に笑われた。いいのだ。健康第一。

それでもやはり、30分が限度で、泳ぎ続けられない。心臓がバクバク言うので、健康にも良くない。とうとう諦めて、シャワーを浴びて温泉を出た。たかだか一時間ほどしか経ってない。食事まで2時間弱もある。案内窓口の横で涼んでいると、徐々にメンバーが上がってきた。何名かに、私が行方不明だと奥さんが探していたといわれた。温泉の

中では一回も彼女と会っていない。マズイと思ったが、普通の服で水着の中に人探しに行くのも変なので、そのまま待っていた。やがて、馬鹿なことをして川下に流されたのではないかと奥さんが心配してたと言われ、このままではマズイと思い、温水プールのほうに探しに行った。20~30分そこで待っていたが、探せない。やがて、上で奥さんが待っているよと知らされ、案内に戻った。新婚の桜井さんは何時も一緒なのに、おたくはすれ違い夫婦だね、とフリーライターの寺田麗子さんのキツイお言葉。

9時からブッフェ形式の食事。さすがに皆さん空腹で、ドンドン御代わりをしている。余り運動ができなかったのも、私は控えめに食べた。温泉プールの横の一段高くなっている所が食堂なので、横を水着の人が通る。なにか落ち着かない。欧米の客が多いが、彼等は同じホテルに数日は滞在しているようである。

英国人のヒギンズさんは、英語の言葉遣いの違いについて食事をしながら説明している。人にぶつかったときに、ソーリーといわずに、エクスキューズミーといわれると、なにか用件があるのかと、思わず相手の顔を見てしまう。相手もこちらを見つめている。見つめ合って変な感じと話している。

思わぬ訪問者

食事もあり、少し離れたタコタルロッジという名の宿泊所に向かう。午後11時前に到着したので、直に部屋割りをして、解散する。一戸建て風の建物が並ぶしゃれた宿泊所である。妻が鍵を開けて、両手に荷物を持った私が続き、後ろ手で戸を締めた。しかし、完全には締まらない。開けようとしても動かない。どうやら鍵穴に鍵を差し込んだまま、中から締めようとしたので、引き戸がおかしくなったようである。フロントにコールするが、誰も出ない。外は真っ暗でひと気がしない。しかし、遠くで人の声が聞こえる。どうやら他の部屋でも鍵が開かないなどのトラブルが発生しているようだ。やがて誰かが通りかかったので、戸を叩いて救助を要請した。鹿谷さんであった。簡単に外からドアを開け解決した。

実は昨日は、私が開きにくい隣の部屋のドアを開ける役割を担っていたのであるが、今日は逆に助けていただいた。鹿谷さんは、何か所か困っている部屋を回って解決し、レスキュー鹿谷ね、といていた。

宿泊所には、インターネットの設備はないし、日本は祝日にあたるので、本日の職場への連絡はなし。パソコンに向かいツアーの記録を書き始めるが、温泉に入った影響で、すぐに眠たくなり就寝する。山間部なので夜間に冷えた。

(文・内海正三/以下次号)



環境情報おきなわ(2004年10月～2004年12月)

◆2004年度環境アセスメント学会沖縄大会

開発ラッシュの沖縄では、環境アセスメントが機能しているのかどうか問われる事態が頻発しています。そこで、2004年度の環境アセスメント学会総会・研究発表会が沖縄で開かれることになりました。環境アセスメントの危機を克服する道を、現場からさぐるためです。沖縄でアセスメントが適正に機能していない状況を全国に情報発信する絶好の機会です。非会員にも公開されていますので、ぜひご参加下さい。

開催日：2004年10月16日(土)～18日(月)

開催地：沖縄大学(沖縄県那覇市国場555)

プログラム：総会 研究発表会

シンポジウム 現地視察ツアー

●シンポジウム1(16日午後1時30分～5時)

「沖縄の開発と環境アセスメント」

●シンポジウム2(17日午後1時30分～5時)

『撤去』と『再生』のための環境アセスメント」

※両日とも会場は沖縄大学3号館101教室

○シンポジウム参加費(一般)／500円

【問合せ先】：研究発表会沖縄事務局

TEL 070-5818-7847

◆宮城晴子画集

名護市の東海岸の嘉陽で豊かな沖縄の自然と人情の中で暮らす画家の宮城晴子さんが、辺野古の海の美しさを画集にしました。いつまでも大事にしたい自然を、その素朴な筆致で鮮やかな陰影の中に再現しています。

画集を見た山口洋子さんが、手軽な絵葉書にして是非多くの人に見てもらいたいと思い立ち、併せて自然保護の運動基金として宮城さんの了解のもと、沖縄の美シリーズ①宮城晴子作品集海の詩②宮城晴子作品集ふるさと③の詩として出版致しました。是非御購入下さい。

◎ 宮城晴子画集「海の詩」(3500円+税)

問合せ／名護市嘉陽28番地 宮城晴子

◎ 宮城晴子作品集「海の詩」(500円)

「ふるさと」(500円)

問合せ／宜野湾市宜野湾3-11-26

電話(098)893-0175 山口洋子

◆新編「消えゆく沖縄の山・海・川」

1996年に発刊され好評を博した「消えゆく沖縄の山・海・川」の新編がこのほど出版されました。前回からの公害・環境問題年表も補足されており、今の状況が分かりやすく整理されています。定価1500円。沖縄環境ネットワーク事務局からも郵送します。

【問合せ先】：沖縄学版 TEL 098-854-1620

【書籍販売】 郵送します

◎『沖縄型・回分式酸化溝のすすめ』価格500円

◎『沖縄の環境と平和』価格1000円

◎『低周波音公害調査』報告書1部500円

◎『沖縄から世界へ』価格1000円

事務局(098-832-8484)までお問合せ下さい

◆沖縄環境ネットワーク世話人会 参加自由です！

日 時：不定(お問合せ下さい)

場 所：沖縄環境ネットワーク事務所

年会費：個人会員：3,000円 学生会員：1,500円

家族会員：3,000円 団体会員：10,000円

特別賛助会員：100,000円

郵便振込先：(口座番号) 02010-9-20132

(加入者名) 沖縄環境ネットワーク

■編集後記■

起こってはいけない事故がつい起きてしまいました。ヘリ墜落現場は大学の敷地と道路の境のわずかなスペース。もしあと5メートルずれていたら、交通量の多い道路の車を直撃していた可能性が高かった場所です。数日後に現場を視察して、改めて身震いの思いでした。街の中心に軍事基地があるという日常が、いかに不確かな日常であることか。足元がぐにやりと溶けていくような思いにとらわれつつ、宜野湾の町を歩いていました。首相はそんな状況を一瞥だにせず、司令官は人的被害を回避した乗員を賞賛する。恐ろしくも不可思議な空間に、私たちは生きています。(哲)

沖縄環境ネットワーク通信・第27号

2004年9月30日発行

発行 〒902-0075 那覇市国場512番地

ワタリアパート106号

沖縄環境ネットワーク

TEL/FAX 098-832-8484

E-mail/netwind@atlas.plala.or.jp

発行人 桜井 国俊 編集 酒井 哲哉

http://homepage1.nifty.com/okikan/